

農村地場産業の特色と問題点

多田 統一

はじめに

地場産業には、さまざまな定義がある。中小企業庁^{1),2),3),4),5)}は、中小企業施策の中で地場産業を「主として地元の資本・技術・労働力・原材料を活用し、広域な地域にある程度集積している中小企業群」と定義し、「集積度等からみると比較的規模は小さいものの、地域にとっては重要な役割を果たしている。」と説明している。

一方地理学辞典^{6),7)}によれば、地場産業(Local Industry)とは「地域的に産地集団を形成し、地元資本が、その地域の労働力を使って、特産品を生産する中小工業」で、「伝統性をもって生成発展してきたものが多く、特定の地域に産地集団を形成しているため、地域との経済的関連が強く、それぞれに地域的特性を保持している。」と解説されている。

「経済地理学の分野でも、板倉勝高^{8),9),10),11),12)}が、地場産業について「中央資本によらない中小・零細規模の地域集団」であると規定し、地理学的な概念であることを強調している。板倉は、地場産業の概念について、交通・運輸・金融等関連する諸産業を含めたものであるとし、歴史的・伝統的な存在、広域の販路をもつことのほか金融的側面を取り上げているのが特徴である。そして、板倉は、日本の工業を都市銀行や政府関連金融機関を軸とする中央金融資本に支えられた近代的工業とそれらに連なる下請産業部門、中央金融資本の恩恵に浴さない地場の資本による中小零細工業群に、地場産業を大都市圏における大都市地場産業と大中小地方都市における地方地場産業に分類している。

いずれにしても、地場産業は、歴史的・伝統的な

存在であること、地域集団を形成することのほか、中小零細規模の地場資本に支えられていること等の特色をもつ。しかし、地場産業は多種多様であり¹³⁾、その明確な基準¹⁴⁾を設けることが難しい。

ところで、農村地場産業¹⁵⁾といった場合、板倉¹⁶⁾が「農村において地場産業を興すことの目的は、それによって農業が推進されることにある。都市の地場産業が、地域社会の文化を基盤にすればよいというだけの要件に制約されるだけであるのと異なる点である。」と述べているように、都市地場産業とは違って伝統的に農家・農村とのつながりが深く、地域農業の発展に寄与するものでなければならない。また、板倉¹⁷⁾が「農村地場産業は、当地農産品・畜産品の加工が主になる。それは食品の場合が多いが、沖縄の芭蕉布や福島県昭和村のからむし織のような場合もある。1村1品運動にみられるように、農村で地場産業を志す者が通常手がけるのは漬物か味噌の場合が多い。」と述べているように、農村地場産業の業種は地域の農畜産物を原料にした農畜産加工業(特に食品)が主体となる。

農村地場産業は、地域農業と密接な関係にあり、産業構造上もこれによる影響を強く受けている。その原料を農畜産物に依存することから、この原料生産の期間・生産量に大きく制約される。この原料供給の不安定性は、労働力雇用上の特色ともなっており、労働集約型の季節産業としての性格を有している。そして、原料供給の不安定性、操業の季節性に加え、需要の小口性という性格から、経営規模が零細で生産性の低い業種となっている^{18),19)}。

板倉^{20),21)}は、地場産業一般の要件として、自前の技術、自前のチャンネル、小規模生産、本物・高

級品，地域文化の上に立つことの5つをあげている。それぞれ，地場産業を技術，製品の販売・流通，経営規模，品質，成立基盤の面からみたものである。

一口に地場産業といっても，製品による違いや産地間の違い，さらには時代による変化のためにその内容は多様である。イメージの置き方しだいで，地場産業に対する考え方も異なってくる。本稿では，地場産業の中でも農村地場産業について，その特色と問題点を発達史，分布・立地，農村集落・農家との結びつき，経営規模と存立形態，製品の販売・流通，技術などの諸側面から探りたい。

I 発達史

中村秀一郎²³⁾は，産地形成の時期によって，江戸時代ないしはそれ以前の伝統型地場産業と明治期以後の近代型地場産業に類型化している²⁴⁾。

農村地場産業は，農畜産物の加工を主体としているため，一般に製造技術が低水準で産地の成立時期が古い。清酒業²⁵⁾のような伝統型地場産業もあれば，農畜産物詰業やブドウ酒醸造業のような近代型地場産業もある。つねに地域農業の基盤の上に立ち，伝統的な原料産地を中心に，経済環境の変化の中で過当競争を繰返してきた。

徳島県の農産物詰業の場合，明治後半期の日清・日露戦争による詰市場の拡大傾向の中で大阪から技術が導入され，福井・新野地区などのタケノコ産地において農家の副業としての詰製造が始まった。第一次大戦後の不況期には，政府による奨励金の交付が大きき力となって産業組合直属の詰工場が設立され，新しい発展への芽生えとなった。第二次大戦後，福井・新野地区を中心に農家の副業による詰工場が続出したが，1960年以降の企業間競争の激化で多くの業者が廃業していった^{26),27)}。

山梨県のブドウ酒醸造業の場合，明治初頭に政府の勸業政策に呼応してブドウ酒の醸造が開始された。明治・大正期には，勝沼・上岩崎・下岩崎などの伝

統的なブドウ産地を中心に発展した。第一次大戦後の不況期には，個人業者が続出し，農村の経済救済策として副業的なブドウ酒醸造がおこなわれた。第二次大戦後，企業合併や法人化の動きが出，1960年代には県外資本の進出により業界の再編成がおこなわれた^{28),29),30)}。

徳島県の農産物詰業と山梨県のブドウ酒醸造業の展開過程をみると，第一次大戦後の不況と農村救済策による新しい発展への芽生え，戦時体制下の企業統合，戦後の企業整備による発展，1960年以降の交易統制の緩和による企業間競争の激化など，両者には産業の発達史に対応するある共通性が認められる。

II 分布・立地

山崎³¹⁾は，地場産業の一般的特徴の1つとして「特定の地域に同一業種の中小零細企業が集中的に立地して，地域的企業集団として産地を形成している。」と述べている。

農村地場産業も特定の地域に同一業種の中小零細企業集団を形成し集中立地しているが，都市地場産業が都市を基盤に成立しているのに対して，農村地場産業の活動舞台は農村にある。

地場産業の全国分布³²⁾をみると，首都圏・中部圏・近畿圏などの先進地域に産地の数が多く，反対に東北・四国・九州などの後進地域に産地の数が少ない。このことを山崎³³⁾は「地場産業が比較的多い県は，明治維新以後のわが国の工業化，さらには戦後の重化学工業化を推進してきた主導的地域とまさに一致しているのである。このことは，古くから地場産業が発達し，その結果蓄積されたさまざまな経営資源が地域経済の重化学工業化の進展の経済的基盤となったのではないか，ということ十分に立証するものだけということができよう。」と説明している。しかし，食料品産地に限ってみると，北海道や東北，その他千葉・長野・静岡・徳島・沖縄などに多い。農村地場産業が食料品を主体にしていることを考え

ると、農村地場産業産地の多くが後進地域にあり、蓄積された資本も近代工業に転位されなかったことがうかがえる。

農村地場産業は、どこの農村にも分布するのではなく、特定の農村に集中している。それは一村一品運動でもわかるように、県単位というよりは市町村単位で分布し、しかも企業集積の核となるべき地区がみられるのもおもしろい。

例えば、1976年度において、30の缶詰工場が阿南市に集中している。ほとんど農村部に分布しているが、特に集積しているのはタケノコ栽培農家の多い福井地区である³⁴⁾。

同様に、勝沼町には1981年度現在27のブドウ酒醸造場が集中しているが、勝沼・上岩崎・下岩崎などの伝統的なブドウ産地に集積している^{35),36)}。

農村地場産業の特定の農村への集中立地の時期は、阿南市においては第一次大戦とその後の好況期、第二次大戦後の経済復興期である。いずれの時期もタケノコ栽培農家の副業経営として缶詰製造がおこなわれた。また、勝沼町においてもそれは第一次大戦後で、農村の経済救済策として副業的なブドウ酒醸造がおこなわれた。

Ⅲ 農村集落・農家との結びつき

中村³⁷⁾は、「地方型地場産業の中にはそれぞれの地域で産出される原材料を利用するものも多く、一般的に言えば、流動性の乏しい中高年層や家庭の主婦の低賃金労働力を大量に導入することによって、相対的に低コストで製品をつくるシステムに、そのよりどころがあった。」と述べている。

農村地場産業は、原料・労働力において農家・農村と密接に結びついている。原料の使用は、地域の農業生産を高めたり、農産物の価格調節の役目もある。労働力の雇用は、低賃金であるが、中高年女子の働き場所として農村地域に果たす役割は大きい。

阿南市の農産缶詰業³⁸⁾の今日までの存続・発展を

考える場合、地元豊富な加工原料があるということを見落とすことができない。市内南部山麓地帯におけるタケノコの一大産地の形成、北西部山麓傾斜地帯での温州ミカンの盛んな栽培、新野地区の西部山間谷あい筋を中心とした農協の指導奨励による加工用水ブキ栽培、そして原料取引における組織化は、地元原料産地に缶詰工場が立地した大きな理由である。阿南市の農産缶詰業は、従来のままの零細経営を続けているタケノコの季節工場が多く経営が小規模であるが、この小規模経営の維持・発展にタケノコ栽培農家の副業的性格が関係している。自家所有の竹林があるということは、タケノコの生出荷と加工とを適度に調整することにより、少々の景気変動にあっても経営上の強みとなった。このことは、1960年以降の交易統制の緩和の中で、新野地区を中心とする地元商業資本による季節工場が廃業してゆく中で、福井地区を中心とする農家の季節工場が比較的多く経営を維持してきていることによってわかる。

また、阿南市の農産缶詰業を考える場合、農村の安価な高年女子臨時労働力を多数投入できたことに負う面が大きい³⁹⁾。常備従業者に比較して季節臨時雇用者の割合が高く、缶詰製造工程上、手作業による流れ作業が多く、男子従業者に比較して手先の器用な女子従業者が多数動員される。従業員平均年齢もかなり高く、他業界にはみられないような高齢者も雇用されている。

京都府相楽郡山城町の缶詰業^{40),41)}の場合も、明治後半期に大阪から技術が導入され、地元農村の豊富なタケノコ原料と安価な臨時労働力に支えられて今日まで零細経営を維持してきた。この地域へのモウソウ竹の導入は、宝暦年間(1751~1763年)にさかのぼると伝えられているが、農家経済上の意味からだけでなく、渋川・天神川・不動川・鳴子川等の天井川の洪水防止の役割をも果たしてきた。

勝沼町の場合、第一次大戦後の不況期に、農村の

救済策として農家の副業によるブドウ酒醸造が導入された。免許税を納入すればよいという簡単な醸造資格であったため、伝統的なブドウ産地を中心に各農家が醸造免許を取得し、自家用ブドウ酒の醸造をおこなった。この時期に、冠婚葬祭や進物用として、ブドウ酒が農村生活の中にはいつてきた。この地域では各家庭でブドウ酒を飲む習慣が根づいているが、家計面で役立つだけでなく、台風によって痛んだブドウや品質の悪いブドウを醸造用にまわすことによって、農業経営の安全弁的な機能も持ちあわせている^{42),43)}。

IV 経営規模と在立形態

清成忠男⁴⁴⁾は、中小零細企業を企業性を基準にして本来の企業、自営的企業、生業的自営業、副業的・内職的自営業の4つに類型化している。農村地場産業は企業としての経済計算の確立していない生業的自営業、副業的・内職的自営業が多く、地場産業の中でも経営規模は小さい。

阿南市の農産缶詰業は、相補的な有力水産缶詰を持ち比較的大規模な工場から出発した静岡県のような場合、従来の地場の中小零細な缶詰工場が静岡を中心とした他地域からの大企業の進出を受けこの二重性の中で発展してきた山形県のような場合とは違い、他地域からの企業進出の影響も少なく地場の中小零細企業が独自の展開を示してきた事例である。特に農家の副業としての季節零細工場が多い点は、京都府相楽郡山城町と共通する特色であり、缶詰製造の問題を企業経営というよりむしろ農業経営の一貫としてとらえなければならない側面を持っている⁴⁵⁾。

阿南市の農産缶詰業の経営形態には、農協系・業者・農家副業といったものがある。特に農家の副業によるものは、4～5月のタケノコ時期だけ缶詰製造をおこない（近辺の農家より主婦20～30人を雇用して、18ℓ缶にして2,000～3,000缶を製造）、あと

の期間は農業を営んでいる。1976年度において、阿南市内30の缶詰工場のうち、11工場が農家の副業である⁴⁶⁾。阿南市の農産缶詰業の戦後の発展を考える場合、農林省の補助による農協系工場（1976年度において市内に9工場あり、うち5工場が年間操業、4工場が季節操業）の近代設備の導入を忘れてはならない。経営効率是一般によくはないが、温州ミカンの過剰対策など積極的に地域農産物の加工がおこなわれてきた⁴⁷⁾。

次に、農村地場産業の地域における存立形態をみると、大中小零細企業の併存地域（勝沼町のブドウ酒醸造業）、中小零細企業の集積地域（阿南市の農産缶詰業）、農家の副業地域（山城町のタケノコ缶詰季節工場）などがある。

勝沼町のブドウ酒醸造業の場合、県外から進出してきた大手資本、地場資本による中堅企業、組合的経営の域を出ない醸造場が併存している。中小地場資本が多いが、県外からの大企業の進出を受け、下請系列化による支配構造の中に組み込まれているものもある^{48),49)}。

V 製品の販売・流通

山崎⁵⁰⁾は、地場産業の条件に、「市場を広く全国や海外に求めて製品を販売している産業であること」をあげている。農村地場産業は、全国的に商業戦略を展開できる大手企業とは違い小口ではあるが販売上の工夫をこらしてその経営を維持している。食料品が中心となるため、味で勝負しなければならない。

勝沼町のブドウ酒醸造業の場合、安価な外国産原料を使用しテレビのコマーシャルにのりだすなど広域の販売市場をもつ大手資本に対して、中堅の地場資本は厳しい販売競争の中で通信販売等独特の方法で経営を維持している。一方、組合醸造による経営は、農村副業として各農家が原料を持ち寄って醸造をおこなうもので、自家消費的な性格を持つ^{51),52)}。

VI 技術

中村⁵³⁾は、日本経済史や技術史の研究者の多くが、地場産業の技術水準を低いものと断定していることに対して、日本で生産された織物機械を例に、「それぞれの産地の零細な機械メーカーが地元の織物をつくるにふさわしく、かつ資本不足に悩む地元の機屋が購入しうる価格で、そしてそこで働く人々の賃金水準と熟練度に見合う品質と価格で、機械を懸命に努力して開発した結果であろう。」と異論を唱えている。農村地場産業の技術水準も地場産業の中でも特に低水準とされるが、むしろ手作業による機械化の困難な部門が、農村地場産業の経営領域として残されてきたためである。

阿南市の農産缶詰業の場合、営業用大缶のタケノコを特色としているが、これらは缶詰製造上機械化が困難である。静岡県のような近代的な機械設備を整えた缶詰工場が発展する中で、手作業を中心とした機械化の困難な部門に依存してその経営を維持してきた⁵⁴⁾。

おわりに

農村地場産業は、農業生産を盛んにし、農村に住む人たちに身近な雇用機会を提供し、農村の伝統文化の継承および発展に寄与するという重要な役割を果たしている⁵⁵⁾。石油危機以降、需要製造の変化や技術革新の進展など経済環境は大きく変化している⁵⁶⁾。農業を推進し農村を発展させるためには、農村に地場産業を興したり、既存の産地を整備・拡充する方法がある。しかし、農村地場産業には不況業種が多いため、個々の経営努力だけでは限界があり政策的な配慮がぜひとも必要となってくる。製品による違いや産地間の違いなど農村地場産業のかかえる問題は多様であるが⁵⁷⁾、優良地場企業を育てるというだけでなく、産地全体の問題として取り組むことが大切である。(東京都立日比谷高校定時制)

〔付記〕本稿は、昭和60年度歴史地理学会大会(於駒沢大学)において発表した内容に加筆・補正したものである。

〔注〕

- 1) 中小企業庁計画部計画課編『図説我が国の産地』1981。
- 2) 中小企業庁編『中小企業施策のあらまし』1983。
- 3) 中小企業庁編『図でみる中小企業白書』1984。
地域産業の中で、地場産業と呼ばれる一群の中小企業群の形成がみられ、さらに、地場産業のうち特定の業種に属する中小企業が多数集積し、産地が形成されている。
- 4) 中小企業庁編『中小企業施策のあらまし』1985。
- 5) 中小企業庁編『中小企業白書』1985。
- 6) 日本地誌研究所編『地理学辞典』二宮書店、1977。
- 7) 自由国民社版『現代用語の基礎知識』1985でも、地場産業を「ある特定の地域に、同じく製品(主に消費財)を生産するひとつの産業が歴史的に定着し特産地(たんに産地ということが多い)を形成している産業」とし、その特徴を、大半が中小企業、立地が特定地域に限定、市場は全国ないし海外向け、生産技術は伝統的ないし低水準、と解説している。
- 8) 板倉勝高編著『地場産業の町 上』古今書院、1978。
- 9) 板倉勝高編著『地場産業の町 下』古今書院、1978。
- 10) 板倉勝高・北村嘉行編著『地場産業の地域』大明堂、1980。
- 11) 板倉勝高『地場産業の発達』大明堂、1981。
- 12) 板倉勝高編著『地場産業の町 3』古今書院、1985。
- 13) 前掲 8), 9), 12) には、地場産業の研究事例が数多く掲載されているが、その業種の多様さには驚かされる。
- 14) 前掲 4)。
1979年に制定された産地中小企業対策臨時措置法では、同年に77産地、1980年に86産地、1981年に35産地が指定された。
- 15) 青柳光太郎「1983年度第2回研究集会報告」東北地理36—2, 1984, 139~141頁。
板倉勝高によるテーマ「農村地場産業成立の要

- 件」に関する基調報告，成功事例として板倉による一関ミート(岩手県一関市)，青柳光太郎による浅舞婦人漬物研究会(秋田県平鹿郡平鹿町)についての報告要旨が掲載されている。
- 16) 板倉勝高「農村複合化の可能性について」東北地理36-1, 1984, 54~60頁。
- 17) 上掲。
- 18) 井上雄二・西塚暢之『現代の産業 食品工業』東洋経済, 1968。
- 19) 日本経済調査協議会編『日本の食品工業』至誠同, 1966。
- 20) 前掲15)
- 21) 前掲16)
- 22) 拙稿「農村地場産業の二, 三の事例から」歴史地理学, 129, 1985, 36~37頁。
- 23) 中村秀一郎『挑戦する中小企業』岩波新書, 1985。
- 24) 山崎充『変わる地場産業』日経新書, 1974。
山崎は，歴史的な視点に立って，産地の成立が明治以前か，明治以後であっても江戸時代ないしそれ以前からの伝統がいまだ強く残っている産地を伝統的地場産業，これに対してそうした伝統が継承されていない戦後形成された産地を現代的地場産業(代表例として戦時中の疎開を契機に形成された諏訪の精密機械)として分類している。
- 25) 拙稿「徳島県南の酒造業について」ふるさと展望9, 1978, 261~262頁。
拙稿「青森県の酒造業」都地研会報15, 1983, 41~43頁。
徳島県南の酒造業は，明治中・後期から大正初期にかけて地主富農層により開始された醸造場が多いが，中には徳川七代将軍家継の時代に酒造りが始まったと伝えられる醸造場もある。これらは農村地場産業とみることができる。一方青森の場合であるが，酒造業は江戸時代初期に始まった。津軽や八戸を中心とした地域に集中し，これらは城下町に継承されてきた商業資本家的酒造業で，地方都市地場産業とみることができる。
- 26) 拙稿「徳島県阿南市の農産缶詰業」日本地理学会予稿集14, 1978, 76~77頁。
- 27) 拙稿「徳島県阿南市の農産缶詰業」経済地理学年報25-2, 1979, 39~50頁。
- 28) 拙稿「農村のブドウ酒共同醸造について」日本地理学会予稿集21, 1982, 168~169頁。
- 29) 拙稿「ブドウ酒醸造業の勝沼」地理28-11, 1983, 78~84頁。
- 30) 拙稿「山梨県勝沼町のブドウ酒共同醸造について」(立正大学地理学教室創立60周年記念会編『地域の探求』古今書院, 1985) 288~294頁。
- 31) 前掲24)
- 32) 山崎充『地域経済活性化の道』有斐閣選書, 1985。
前掲1)を資料に分析がおこなわれている。
- 33) 上掲。
- 34) 前掲27)
- 35) 前掲29)
- 36) 前掲30)
- 37) 前掲23)
- 38) 前掲27)
第二次大戦後年間操業に移行した工場では，タケノコ(4~5月)→フキ(6~7月)→クリ(9~11月)→ミカン(12~翌年3月)というローテーションが基本となる。
- 39) 拙稿「静岡県の缶詰業」立正地理学会研究発表大会予稿集6, 1985, 5~7頁。
拙稿「静岡県の缶詰業」都地研会報17, 1985, 18~19頁。
地方都市地場産業としての清水市の缶詰工場では，都市の中老年女子労働力が雇用されている。
- 40) 拙稿「京都府南端奈良県境の農業」日本地理学会予稿集16, 1979, 150~151頁。
- 41) 拙稿「農産加工の事例研究——京都府相楽郡山城町のタケノコ缶詰季節工場について——」明治大学大学院紀要17, 1980, 169~179頁。
- 42) 前掲29)
- 43) 前掲30)
- 44) 清成忠男『現代中小企業の新展開』日本経済新聞社, 1972。
- 45) 拙稿『本邦缶詰業の地域的特色』日本地理学会予稿集27, 1985, 228~229頁。
- 46) 前掲27)
- 47) 拙稿「青森県の農水産加工」日本地理学会予稿集18, 1980, 216~217頁。
青森県でも，農林省の事業で1970年以降積極的にリンゴ加工がおこなわれるようになった。
- 48) 前掲29)
- 49) 前掲30)
- 50) 前掲24)

- 51) 前掲29)
- 52) 前掲30)
- 53) 前掲23)
- 54) 前掲27)

- 55) 前掲 3)
- 56) 前掲 5)
- 57) 前掲24)